

《そ の 他》

コロナ禍における基礎看護学実習Ⅰの学内実習での コミュニケーション教育の取り組み

阿 部 智 美¹⁾, 木 田 優 子¹⁾, 高 橋 義 孝¹⁾, 幸 山 靖 子¹⁾

要旨：新型コロナウイルスの感染拡大により，2020年度の基礎看護学実習Ⅰの一部が学内実習で行われた。基礎看護学実習Ⅰを学内で履修する1年生は患者とのコミュニケーション場面を具体的に想定することが難しい。そのため，学内実習でのコミュニケーション教育は視聴覚教材等を活用し，ロールプレイを用いたグループ学習を行った。そこで，学生の基礎看護学実習Ⅰのレポートから学内実習でのコミュニケーションに関する学びを明らかにした。レポートを分析した結果，学内実習でのコミュニケーションに関する学びについて，【コミュニケーションの目的】【コミュニケーションの方法】【看護師への報告】【コミュニケーションに必要な態度】【今後の課題】のカテゴリが得られた。学内実習からコミュニケーションの方法に関する具体的な学びが得られた。学生の学びを効果的なものとするため，今後の教育方法の開発が重要であることが示唆された。

キーワード：基礎看護学実習，コミュニケーション，学内実習，コロナ禍

Ⅰ. はじめに

2020年度の医療関係養成機関の臨地実習は，新型コロナウイルスの感染拡大によって，実習施設での実施が困難な状況となった。厚生労働省等からは「実習施設等の代替が困難である場合，実状を踏まえ実習に代えて演習又は学内実習等を実施することにより，必要な知識及び技能を修得することとして差し支えない」との通達を受けた¹⁾。各医療関係養成機関では，感染の拡大や実習施設の状況等により，様々な対応がとられた^{2), 3)}。A看護大学においても入学後初めて実習する基礎看護学実習Ⅰで病棟実習の受け入れが中止となり，一部が学内実習で行われた。

基礎看護学実習Ⅰの実習目的は，「入院し，治療・看護を受けている患者を理解し，患者に必要な日常生活の援助を実践するための基礎的能力を養う。また，患者と看護者の関わりの見学および自ら関わる体験を通して患者・看護者関係成立の基礎を学ぶ」としている。通常は，病棟実習で看護実践の見学や体験を通し

て実習目的について学んでいる。特に，コミュニケーションに関しては，看護師と患者とのコミュニケーション場面を見学し，学生自身も受け持った患者とコミュニケーションをとることで学びを深めている。しかし，学内実習の学生は患者とのコミュニケーション場面を具体的に想定することが困難である。また，患者とコミュニケーションをとる際に必要な対象の理解も十分ではない。そのため，学内実習でのコミュニケーション教育は難しいのではないかと考えた。そこで，このような課題を解決するために，視聴覚教材等を活用し，ロールプレイを用いたグループ学習を行った。

コロナ禍で行われた基礎看護学実習Ⅰの学内実習での教育実践をまとめ，コミュニケーション教育に焦点を当て，学生の学びを明らかにすることは，今後の看護基礎教育の資料となると考えた。そこで，本研究の目的は，基礎看護学実習Ⅰで学内実習を行った学生のレポートから，学内実習でのコミュニケーションに関する学びを明らかにすることとした。

1) 弘前学院大学看護学部

連絡先：阿部智美 〒036-8231 青森県弘前市稔町20-7

Tel：0172-31-7100, Fax：0172-31-7101, E-mail：tomomi@hirogku-u.ac.jp

受理：2022年2月21日

表1 基礎看護学実習Ⅰの実習目的・実習目標

<p>I. 実習目的</p> <p>入院し、治療・看護を受けている患者を理解し、患者に必要な日常生活の援助を実践するための基礎的能力を養う。また、患者と看護者の関わりを見学および自ら関わる体験を通して患者・看護者関係成立の基礎を学ぶ。</p> <p>II. 実習目標</p> <p>1. 患者の療養環境を知る。</p> <p>1) 患者の物理的環境、心理・社会的環境を知る。</p> <p>2) 病気・入院は、受け持ち患者の生活や生活環境にどのような影響を与えたかを心理・社会的面を含めて理解する。</p> <p>2. 患者とのコミュニケーション、人間関係の成立について理解を深める。</p> <p>1) 看護者の患者とのコミュニケーションを見学し、コミュニケーションの持ち方について理解を深める。</p> <p>2) 受け持ち患者とのコミュニケーションを通して、コミュニケーションの持ち方を理解する。</p> <p>3) 受け持ち患者との人間関係を振り返り、関係成立過程、関係成立の関連因子について理解する。</p> <p>3. 患者に必要な日常生活の援助を理解できる。</p> <p>1) 患者に行われている看護の見学を通して、種々の状態にある患者と患者が必要としている日常生活の援助を理解する。</p> <p>2) 受け持ち患者に必要な日常生活の援助、その必要性、実施方法を理解する。既習の看護技術については、指導のもとに体験する。</p> <p>4. 将来、看護専門職者となるための看護観と態度を養う。</p> <p>1) 患者を受け持つて実習することの自覚と責任を持ち、真摯な態度をとれる。</p> <p>2) 自分の態度や実習内容を振り返り、自己の傾向に気づくことができる。</p> <p>3) 看護専門職者となるための、自己の課題を明らかにすることができる。</p>
--

II. 基礎看護学実習Ⅰの概要

1. 実習目的・実習目標と開講時期

基礎看護学実習Ⅰ（1単位45時間）は、1年生の2月に行われる。実習目的と4つの実習目標が設定されている。4つの実習目標に設定された下位目標も含め、実習目的・実習目標を表1に示した。

2. 通常の実習方法

通常、基礎看護学実習Ⅰは、実習初日に学内で実習施設ごとにオリエンテーションを受けて、翌日から3日間の病棟実習を行う。病棟実習では、学生は患者1名を受け持ち、看護実践の見学や体験を通して、実習目的・実習目標について学んでいる。最終日には学生カンファレンスを通して実習目的・実習目標についての学びを共有している。

III. 研究方法

1. 学内実習の方法

2020年度の基礎看護学実習Ⅰでは、新型コロナウイルスの感染拡大により、病棟実習の一部が中止となった。そこで、通常、上記の病棟実習が行われる1日を実習施設での病院オリエンテーション、それ以外の2

日間を学内実習に変更した。病院オリエンテーションでは、実習施設の看護部から病院や実習病棟の概要等について説明していただいた。

上記の学内実習となった24名の学生は、12名ずつ前半と後半で時期を分けて学内実習を行った。さらに12名の学生は、6名ずつの2グループに分かれ、1グループで市販の視聴覚教材の動画の看護事例^{4)~6)}の患者1名を受け持つこととした。動画の看護事例の受け持ち患者は、前半は脳梗塞の60歳代・男性、肝炎の40歳代・女性、後半は脳梗塞の60歳代・男性、大腿骨頸部骨折の70歳代・女性とした。学生には疾患の病態や症状、看護に関する資料を配布した。

学内実習では、主に実習目標ごとに事前学習の内容を確認し、実習目標について説明した後、視聴覚教材等を提示し、実習目標について個人で考えをまとめ、6名のグループでその意見を共有し、2つグループが互いに発表し合うという形式で行った。また、学内実習ではあるが、病棟実習と同様に、実習記録用紙に本日の実習目標を記載して、1日の振り返り等をまとめた。

学内実習は以下の内容で行った。実習目標1. 患者の療養環境を知る、実習目標2. 患者とのコミュニケーション、人間関係の成立について理解を深めるについて学ぶため、病院の環境に関するスライドや看護事例

の動画等を視聴した(学内実習1日目午前)。さらに、実習目標2. 患者とのコミュニケーション、人間関係の成立について理解を深めるについては、ロールプレイを用いたグループ学習を行った(学内実習2日目午前)。実習目標3. 患者に必要な日常生活の援助を理解できるについて学ぶため、看護事例の動画から、ヘンダーソン⁷⁾が述べた「基本的看護の構成要素」に沿って患者の状態と必要な援助について考えた(学内実習1日目午後)。実習目標4. 将来、看護専門職者となるための看護観と態度を養うについて学ぶために、事前学習の「看護者の倫理綱領」⁸⁾の内容を確認し、看護師の仕事の様子やインタビューを収録した動画を視聴した(学内実習2日目午後)。

2. 学内実習でのコミュニケーション教育の方法

1) 学内実習全体を通しての取り組み

学内実習での経験が、次の実習に活かされるように、病棟実習と同様に身だしなみや挨拶等の態度にも注意して行った。例えば、学内実習ではユニフォームを着用したが、通常の病棟実習と同様に、朝の身だしなみの確認をしてから学内実習を開始した。また、病棟実習の開始や終了時、休憩時に行う挨拶もグループで声を出して練習した。その際に、事前に配布した「初めての实習でのコミュニケーション」と題したコミュニケーションの冊子を活用した。この冊子は患者とのコミュニケーションや実習場でのコミュニケーションについて、具体的なコミュニケーション例とその説明をまとめたものである⁹⁾。

2) ロールプレイを用いたグループ学習前の取り組み

学内実習でロールプレイを用いたグループ学習を行う前には、受け持ち患者の状態について理解を深め、看護師のコミュニケーションのとり方について学ぶため、グループで意見交換した。具体的には、看護事例の動画を視聴して、実習目標1の下位目標1) 患者の物理的環境、心理・社会的環境を知る、2) 病気・入院は、受け持ち患者の生活や生活環境にどのような影響を与えたかを心理・社会的面を含めて理解するについて意見交換した。また、ヘンダーソン⁷⁾が述べた「看護の独自の機能」について確認した後、「基本的看護の構成要素」に沿って動画の受け持ち患者の状態と必要な援助について意見交換した。その際には、配布した疾患の病態や症状、看護に関する資料を活用した。

さらに、看護事例の動画の看護師と患者とのコミュ

ニケーション場面の視聴から、実習目標2の下位目標1) 看護師の患者とのコミュニケーションを見学し、コミュニケーションの持ち方について理解を深める、3) 受け持ち患者との人間関係を振り返り、関係成立過程、関係成立の関連因子について理解するについて意見交換した。

その他に、ロールプレイを用いたグループ学習の準備として、グループ6名全員が看護学生役で、ロールプレイに参加できるように役割を決めた。役割は受け持ち患者と初めて挨拶する場面1名、会話する場面1名、患者へ質問する場面2名、看護師へ報告する場面1名、看護師へ質問する場面1名とした。患者への質問は動画の受け持ち患者に尋ねたいことを2つ、看護師への質問は動画の看護師に尋ねたいことを1つ、グループで考えた。また、ロールプレイでは教員が動画の患者役・看護師役になることを説明した。その他に、役割を決めた後、ロールプレイの各場面でのコミュニケーションの方法(具体的な言葉づかいや注意点等)について、グループで話し合った。グループでコミュニケーションの方法について話し合う際には、事前配布したコミュニケーションの冊子⁹⁾を活用した。

3) ロールプレイを用いたグループ学習の取り組み

グループ学習の進め方は、ロールプレイの前に、教員が学生から各場面のコミュニケーションの目的や方法を確認した。その後にロールプレイを行い、良かったところや出来ていたところについて皆で意見を出した。ロールプレイを行った学生からは意見や感想、不明な点等を尋ね、さらに良くする点として改善点を皆で話し合った。必要な場合には、改善点として提案されたコミュニケーションの方法をロールプレイで再実施した。このグループ学習の進め方は、ソーシャルスキルトレーニングの基本訓練モデルを活用した^{10), 11)}。場面に応じて柔軟に進行を進めながら、1グループ(1事例目)の6場面を実施し、休憩を挟んでもう1グループ(2事例目)も同様に実施し、2つのグループ合同で行った。

皆で意見が交換しやすいように、2つの看護事例の動画は全員が視聴し、グループで意見交換した内容は発表して、全体で共有した。また、ロールプレイを実施した学生が戸惑ったこと等は、できるだけ皆で話し合いながら、改善点を考えた。その他にロールプレイがしやすいように、講義室からベッドがある実習室に場所を移動して行った。参加しやすいように、全員の

椅子を用意してベッドを囲んで輪になってもらった。

各場面のロールプレイで教員が留意したことは、受け持ち患者と初めて挨拶する場面や会話する場面では、言葉づかいといった言語的コミュニケーション以外に、目線を合わせる等の非言語的コミュニケーション、病室に入る際の挨拶等のマナーについて説明した。患者へ質問する場面では、挨拶や会話の場面で学んだコミュニケーションの方法を活用しながら、開かれた質問や閉じた質問の使い方、話の聴き方、患者のペースに合わせた話し方等のコミュニケーションの方法を説明した。また、患者との話が續かないときや患者からネガティブな言葉を聴いたとき、分からないことを尋ねられたときの対応等も話し合った。最後に、グループで1場面ずつ2つの事例でロールプレイしたが、同じ挨拶をする場面でも患者の状況に合わせたコミュニケーションの方法が必要であることを説明した。

看護師へ報告する場面や質問する場面では、看護師への声の掛け方や、順序立てて分かりやすく話すこと、メモ帳に要点を整理しておくこと等について説明した。その他に、看護師が忙しいとき、看護師から質問されたことが分からなかったときの対応等についても話し合った。事前に2名の教員で打合せを行い、患者役を交代しながら行った。

3. 対象者

看護大学の2年生で、1年次の基礎看護学実習Ⅰで学内実習を行った24名を対象とした。実習終了後に実習目標に沿って学びをまとめたレポートを分析対象とした。

4. データ収集方法

基礎看護学実習Ⅰの成績評価が終了した後に、対象者に本研究の目的や方法、倫理的配慮を記載した説明書と同意書を配布して研究協力について説明した。研究協力を同意する学生は一定期間設置する回収箱へ同意書を提出するように説明した。同意が得られた学生のレポートを分析に用いた。

5. 分析方法

研究協力を同意が得られた学生のレポートは、表紙の学籍番号、氏名の個人情報を除いてから、レポートの記述内容をまとめた。レポートの記述内容は、実習目標2. 患者とのコミュニケーション、人間関係の成

立について理解を深めるについての記述から、研究目的と照らし合わせて「学内実習でのコミュニケーションに関する学び」を抽出した。抽出した記述の類似性・相違性に留意しながら分類し、サブカテゴリ、カテゴリを作成した。分析では研究者間で検討した。

6. 倫理的配慮

対象者には説明書を用いて研究の目的と方法、倫理的配慮を説明し、研究協力の同意が得られた学生のレポートを分析した。倫理的配慮として、研究への協力は自由であり、研究協りに同意しない場合でも不利益を被ることはないこと、レポートの学籍番号、氏名は削除して個人情報の保護に努めること、研究結果は論文等で公表するが、個人情報が公表されることはないこと等を伝えた。本研究は、弘前学院大学倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号：21-04）。

IV. 結 果

研究協力の同意が得られた学生13名の基礎看護学実習Ⅰのレポートを分析した。レポートの分析から学内実習でのコミュニケーションに関する学びについて、82の記述から5つのカテゴリ【コミュニケーションの目的】【コミュニケーションの方法】【看護師への報告】【コミュニケーションに必要な態度】【今後の課題】が得られた。その結果を表2に示す。カテゴリを【 】, サブカテゴリを〈 〉で示し、以下に説明する。

【コミュニケーションの目的】は3つのサブカテゴリ〈関係形成や援助の提供〉〈共感や励まし〉〈患者との目標の共有〉が得られた。【コミュニケーションの方法】は11のサブカテゴリ〈話しやすい環境づくり〉〈目線を合わせる〉〈観察〉〈挨拶の仕方〉〈話す内容の準備〉〈質問の方法〉〈言葉の選択〉〈関係成立の方法〉〈傾聴〉〈患者に合わせた対応〉〈戸惑ったときの対応〉が得られた。【看護師への報告】は3つのサブカテゴリ〈看護師への報告や質問〉〈看護師への相談や確認〉〈看護師が忙しいときの対応〉が得られた。【コミュニケーションに必要な態度】は3つのサブカテゴリ〈患者に関心を寄せる〉〈患者の立場を考える〉〈患者に寄り添う〉が得られた。【今後の課題】は3つのサブカテゴリ〈自己の課題の気づき〉〈意識して取り組む〉〈経験を積む〉が得られた。カテゴリの中では、【コミュニケーションの方法】は記述数が46と最も多く、11のサブカ

表2 学内実習でのコミュニケーションに関する学び

カテゴリ	サブカテゴリ	記述（一部抜粋）
コミュニケーションの目的 (7)	関係形成や援助の提供 (3)	コミュニケーションから得られた情報は、治療やケアはもちろん、患者と良好な関係性を築いていく上で重要であり、個性のある看護を行うための基礎となることを学んだ
	共感や励まし (3)	患者を励ますことや、患者の回復を感じたらそれを伝えること、時には共感することが、リハビリ期の看護において重要なコミュニケーションであると学んだ
	患者との目標の共有 (1)	看護師は患者の不安な気持ちを否定せずに受け止める。そして、コミュニケーションで得られた情報から、患者とともに実現可能な新しい目標を立てることが重要であると学んだ
コミュニケーションの方法 (46)	話しやすい環境づくり (3)	看護師と患者とのコミュニケーションを見学して、肩に手を置いたり相打ちを打ったりして非言語的コミュニケーションを活用し、話しやすい環境が作られていると感じた
	視線を合わせる (2)	挨拶では、看護師はかがむなどして、患者と視線を合わせることで威圧感を与えることなくコミュニケーションが図れていた。起き上がれない患者の場合は、顔の近くまで行って声を掛けることで、視線が合わせやすく、声も届きやすくなると分かった
	観察 (5)	患者の会話中の何気ない表情も大切にすることだ。患者の表情は患者の今の状態や言葉にはしない訴えになっていることを改めて学んだ
	挨拶の仕方 (1)	最初に挨拶にいくときの印象が良いか悪いかでその人の印象は決まってしまうと思った
	話す内容の準備 (3)	会話では、不自然な間を作らない為にも、あらかじめ話す内容を決めておくことが大切だと分かった
	質問の方法 (4)	患者への質問の際は、引き出したい情報に合わせて「聞かれた質問」と「閉じた質問」を有効的に使い分けことが重要であると分かった
	言葉の選択 (3)	言葉の選択次第で患者がその言葉の意味をどう捉えるかが変わってくるので言葉の選択はとても大事だということを改めて感じた
	関係成立の方法 (10)	信頼関係は、患者の話を聴こうとする姿勢や視線を合わせて目を見て話すことを積み重ねていくことで築かれていくとわかった
	傾聴 (4)	患者の発言した内容を繰り返し言うことで、看護師は頭の中を整理することができるし、患者は自分の話を聞いてくれているという気持ちになり、信頼関係が形成されるきっかけになると学んだ
	患者に合わせた対応 (7)	患者の状態によって話し方や話の流れを変えることができるように対応幅を広げることだ
	戸惑ったときの対応 (4)	どうしても会話が続かなかった場合は、一時的に席を外し、話す内容についてもう一度ゆっくり考えることも有効な手段であると学んだ
	看護師への報告 (5)	報告内容を事前にメモ帳にまとめておき、看護師にあまり時間をとらせないようにすることが大切だと分かった
コミュニケーションに必要な態度 (7)	看護師への報告や質問 (2)	患者に聞かれて分からないところは、自己判断せずに看護師に相談し、確認してから患者に情報を伝えることの重要性も知ることができた
	看護師への相談や確認 (2)	どうしても忙しそうにしていた場合は、「何時ごろであれば大丈夫ですか」と確認することも大事だと学んだ
	看護師が忙しいときの対応 (1)	どうしても忙しそうにしていた場合は、「何時ごろであれば大丈夫ですか」と確認することも大事だと学んだ
コミュニケーションに必要な態度 (7)	患者に関心を寄せる (4)	患者とコミュニケーションを通して一番大事だと感じたことは患者と「話をしたい」「話を聞きたい」という意欲をしっかりと意思に示すことだ
	患者の立場を考える (2)	自分自身が患者さんの立場になって考えることで、どのように接してもらえると話しやすいかなどを考えることができた
	患者に寄り添う (1)	会話の中でも繰り返しや共感など、相手に親身になって寄り添うことの意義が大きいように感じた
今後の課題 (17)	自己の課題の気づき (6)	話を上手くまとめられずに相手に伝えたいことが伝わらないなどの課題が見つかった 自分が日頃無意識にしているような癖に気づきそれを直していくことが大切だと学んだ
	意識して取り組む (9)	2年生の実習では、まず患者と視線を合わせながら笑顔で挨拶し、傾聴や共感などを意識しながらコミュニケーションに臨んでいきたい 普段の日常生活でのコミュニケーションから目を見て話すことや相手の話を傾聴する姿勢をつくっていきたくと考えている
	経験を積む (2)	頭で考えているときと実際にやってみるとでは全然違い、たくさんの経験の積み重ねは大事だなと感じた

() は記述数を示す

カテゴリから構成され、様々なコミュニケーションの方法が挙げられていた。また、【コミュニケーションの方法】の11のサブカテゴリの中では、〈関係成立の方法〉は記述数が10と最も多く、実習目標2の下位目標3に関する内容であった。

V. 考 察

1. 学内実習でのコミュニケーションに関する学び

本研究は、基礎看護学実習Ⅰで学内実習を行った学生のレポートから、学内実習でのコミュニケーションに関する学びを明らかにすることを目的に行った。その結果、【コミュニケーションの目的】【コミュニケー

シヨンの方法】【看護師への報告】【コミュニケーションに必要な態度】【今後の課題】のカテゴリが得られた。

看護学教育モデル・コア・カリキュラム¹²⁾において、臨地実習は看護の知識・技術を統合し、実践へ適用する能力を育成する教育方法の一つである。看護系人材として求められる基本的な資質と能力を常に意識しながら、多様な場、多様な人が対象となる実習に臨む。その中で知識と技術の統合を図り、看護の受け手との関係形成やチーム医療において必要な対人関係能力や倫理観を養うとともに、看護専門職としての自己の在り方を省察する能力を身に付けると述べられている。

基礎看護学実習Ⅰの実習目的は「入院し、治療・看護を受けている患者を理解し、患者に必要な日常生活の援助を実践するための基礎的能力を養う。また、患者と看護者の関わりを見学および自ら関わる体験を通して患者・看護者関係成立の基礎を学ぶ」とある。本研究で焦点を当てた実習目標2. 患者とのコミュニケーション、人間関係の成立について理解を深める以外に、実習目標1. 患者の療養環境を知る、3. 患者に必要な日常生活の援助を理解できる、4. 将来、看護専門職者となるための看護観と態度を養うについて、学内実習を通して学んでいる。このような他の実習目標から得られた対象の理解や看護者としての役割や態度等に関する学びが統合されたことで、【コミュニケーションの目的】【コミュニケーションの方法】【コミュニケーションに必要な態度】といったカテゴリが得られ、コミュニケーションに関する様々な学びが得られたのではないかと考える。

2. 学内実習でのコミュニケーション教育の方法

日本看護系大学協議会が行った2020年度 COVID-19に伴う看護学実習への影響調査¹³⁾によると、基礎看護学実習では、学内実習への変更なしが約25%であった。実習内容・方法の変更に伴う代替えの実際には、視聴覚教材については全体で75.5%が活用、事例の活用については80.1%と報告されている。

本研究においても、1年生は初めての实習であるため、患者の状態を理解し、患者とのコミュニケーション場面を想定することが難しいと考えた。そのため、今回の学内実習では、主に看護事例の動画を用いて、患者が置かれている状況やこれまでの経緯等を理解し、患者の表情や声の様子等の具体的な言動にも注意した。また、動画での患者と看護師のコミュニケーション

ン場面も注意して視聴した。これらから、【コミュニケーションの目的】や【コミュニケーションの方法】といった学びを深めることができたのではないかと考える。その他に、学生が実習で経験することが多い場面の具体的なコミュニケーションの方法をまとめたコミュニケーションの冊子⁹⁾を活用することで、グループでロールプレイでのコミュニケーションの方法を考えるのに役立ったと考える。さらに、ロールプレイを行うことで、コミュニケーションの方法を実際に体験することができた。これらによって、〈目線を合わせる〉といった【コミュニケーションの方法】の具体的な学びが得られたのではないかと考える。さらに、グループで質問やコミュニケーションの方法を考えて、ロールプレイから良かったところや改善点について話し合い、様々な意見を共有することができた。これらから、【今後の課題】へと繋げることができたのではないかと考える。

3. 今後の課題

日本看護系大学協議会の2020年度 COVID-19に伴う看護学実習への影響調査¹³⁾によると、基礎看護学で困難な到達目標については「実際の患者・家族とコミュニケーションや関わりができない」「看護師の実践を見ることができなかった」「チーム医療・カンファレンスに参加できなかった」「専門職への報告ができなかった」「現場での緊張感が味わえない、失敗体験が少ないため社会人の基礎力の育成ができない」が挙げられている。今回、学内実習でのコミュニケーション教育を通して患者とのコミュニケーション以外に、【看護師への報告】についての学びも得られた。しかし、実際の患者・家族に寄り添い、臨床現場の状況に応じたコミュニケーション力を高めていくことは、継続的な研鑽が必要であると考え。基礎看護学実習の終了後、成人看護学実習、老年看護学実習等の領域実習が行われる。各領域が連携してコミュニケーション教育を行っていくことが必要であると考え。

日本看護学教育学会が看護学生を対象に行った調査¹⁴⁾では、講義・演習・臨地実習の実施方法が変更される中、学習継続への不安があると回答した者が7割を超えると報告されている。基礎看護学実習Ⅰは、学生にとって初めての看護学実習でこれからの学修の動機づけとなる実習である。学内実習でのコミュニケーションに関する学びに、【今後の課題】が得られ、

学生は真摯に取り組み、グループで協力し合うこともできていた。今後も学生の学修意欲を高めていくことは重要であると考えている。

新型コロナウイルス感染症下における看護系大学の臨地実習の在り方に関する有識者会議の報告書¹⁵⁾では、看護系大学は新たな教育方法の開発について教育効果を適切に検証しつつ、教育の質向上に取り組む必要がある。また、今回の学内演習や臨地実習で得られたことの評価や、学内演習や臨地実習にかかる教育手法・教育力の評価を通して、看護専門職者に求められる看護実践能力が、どのような環境下にあっても、各大学の実習・演習において適切に修得できるよう、今回の経験を第一歩として、継続して検討がなされる必要があるであると述べられている。

今後も感染症の拡大による実習への影響はないとは言えない。臨地実習の中止や実習方法の変更もありえる。しかし、そのような場合においても各領域や実習施設との連携をとりながら、迅速に対応し、学生の学びを継続し、教育効果が高められるように教材の準備や教育方法の開発を進めていくことは重要であると考えている。

VI. 結 論

本研究は、新型コロナウイルスの感染拡大により、基礎看護学実習Ⅰの一部を学内実習で行った学生のレポートから、学内実習でのコミュニケーションに関する学びを明らかにすることを目的に行った。その結果、学内実習でのコミュニケーションに関する学びについて【コミュニケーションの目的】【コミュニケーションの方法】【看護師への報告】【コミュニケーションに必要な態度】【今後の課題】のカテゴリが得られた。視聴覚教材等を活用し、ロールプレイを用いたグループ学習からコミュニケーションの方法に関する具体的な学びが得られた。また、対象の理解や看護者としての態度等の他の実習目標の学びが統合されたことで、これらの学びが得られたと考える。学生の学びを効果的なものとするため、今後の教育方法の開発が重要である。

謝 辞

研究を行うにあたり、ご協力いただきました学生の

皆様に心より感謝致します。研究の過程で多くの助言をいただきました皆様に感謝致します。

利 益 相 反

本研究に関する利益相反はない。

文 献

- 1) 文部科学省初等中等教育局, 文部科学省高等教育局, 厚生労働省医政局, 他 (2020年2月28日掲載), 新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校, 養成所及び養成施設等の対応について. <https://www.mhlw.go.jp/content/000603666.pdf> (参照2021年9月14日)
- 2) 篠原幸恵, 讃井真理, 河野保子, 他, 看護系大学のコロナ禍における基礎看護学実習Ⅰの学習実習の実態と教育の質確保に関する検討, 健康生活と看護学研究, 人間環境大学松山看護学部紀要, 3, 14-19, 2020.
- 3) 樋勝彩子, 鈴木彩加, 田中加苗, 他, コロナ禍におけるコミュニケーション実習, 動画を通して学ぶ患者とのコミュニケーション, 聖路加国際大学紀要, 7, 177-182, 2021. DOI: 10.34414/00016382 (参照2021年11月27日)
- 4) 荒川靖子, 櫻井美代子原案監修, 看護のためのアセスメント事例集 第2版 VOL.1, 大腿骨頸部骨折患者の看護事例, 医学映像教育センター, 2012.
- 5) 櫻井美代子原案監修, 看護のためのアセスメント事例集 第2版 VOL.5, 脳梗塞患者の看護事例, 医学映像教育センター, 2012.
- 6) 玉木ミヨ子原案監修, 看護のためのアセスメント事例集 第2版VOL.9, 肝硬変症患者の看護事例, 医学映像教育センター, 2012.
- 7) ヴァージニア・ヘンダーソン (湯楨ます・小玉香津子訳), 看護の基本となるもの, 東京, 看護協会出版会, 2016.
- 8) 日本看護協会, 看護者の倫理綱領, 2003.
- 9) 阿部智美, 石田萌, 幸山靖子, 基礎看護学実習でのコミュニケーション冊子の有用性と課題, 弘前学院大学看護紀要, 14 (1), 15-22, 2018.
- 10) 角谷慶子, SSTの技法と理論 さらなる展開を求めて, 西園昌久 (編), 47-57, 東京都, 金剛出版, 2009.
- 11) 阿部智美, ソーシャルスキルトレーニングの技法を用いた看護学生のコミュニケーショントレーニングの学習効果, 課題提供者とグループメンバーの比較, 北日本看護学会誌, 17 (2), 39-47, 2015.
- 12) 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会 (2017年10月掲載), 看護学教育モデル・コア・カリキュラムー「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の修得を目指した学修目標ー. https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/078/gaiyou/

- icsFiles/afieldfile/2017/10/31/1397885_1.pdf (参照 2021年10月26日)
- 13) 日本看護系大学協議会 看護学教育質向上委員会 (2021年4月掲載), 2020年度 COVID-19 に伴う看護学実習への影響調査 A 調査・B 調査報告書. <https://www.janpu.or.jp/wp/wp-content/uploads/2021/04/covid-19cyousaAB.pdf> (参照2021年10月26日)
- 14) 一般社団法人日本看護学教育学会 (2021年7月7日掲載), 調査「新型コロナウイルス感染症拡大状況下で教育を受ける看護学生の声」概要. <https://jane-ns.or.jp/wp-content/uploads/2021/07/210713.pdf> (参照 2021年10月26日)
- 15) 新型コロナウイルス感染症下における看護系大学の臨地実習の在り方に関する有識者会議 (2021年6月8日掲載), 報告書 看護系大学における臨地実習の教育の質の維持・向上について. https://www.mext.go.jp/content/20210608-mxt_igaku-000015851_0.pdf (参照 2021年10月26日)